海外在留邦人の乳幼児・学童健康相談

―― 発達問題を中心に ――

南里清一郎*

2004年外務省の統計では，海外在留邦人数は961,307人であり，長期滞在者（3ヶ月以上の滞在で永住者でない邦人）は659,003人，永住者（当該在留国より永住権を認められている者）は302,304人である[1]。そのうちアジアの在留邦人数は234,734人で，国・地域別では，中華人民共和国，タイ，シンガポール，大韓民国，台湾，フィリピン，インドネシア，都市別にみると，上海，香港，バンコク，シンガポール，マニラ，台北，ソウル，北京，ジャカルタの順で在留邦人数が多い。アジアにおいて，日本人学校，補習授業校，その他（現地校・国際学校等）で教育を受けている子女数は16,981人で，さらに，乳幼児を加えると多くの子ども達が，海外で生活をしている。海外子女教育振興財団によれば，2005年6月1日現在，バンコク日本人学校の在校生は小学生1,722人，中学生436人，ジャカルタ日本人学校は小学生637人，中学生222人，幼稚部195人，またマニラ日本人学校は小学生380人，中学生80人である[2]。筆者は1988年からJICA，外務省，独立行政法人労働者健康福祉機構の海外巡回健康相談に小児科医として参加しているが，近年，発達（言語発達，精神運動発達）に関する相談が増加している。このような相談に関しては，同じ言語・文化を共有する日本人医師の関わりが必要と考えられる[3]。海外邦人医療基金では，2001年から，ジャカルタ，バンコク，マニラ，クアラルンプール，シンガポールで小児の発達問題を中心に乳幼児・学童健康相談を行なっているが，本稿では2003年バンコク，2004年ジャカルタ，2005年マニラにおける相談内容，および都市による差異について報告する。

対象と方法

対象は，バンコク，ジャカルタ，マニラ在留邦人の子女，計169人である（表1）。全員を対象に，身体発育曲線による成長の評価と遠城

表1　乳幼児・学童健康相談対象者

都市名	バンコク	ジャカルタ	マニラ
相談日	2003年7月6日～8日	2004年12月9日～11日	2005年11月24日～26日
相談日数（日）	3	2.5	2.5
相談者数（人）	53（男33，女20）	44（男19，女25）	72（男33，女39）
年齢	5ヶ月～6歳4ヶ月	7ヶ月～9歳0ヶ月	1ヶ月～10歳7ヶ月

* 慶應義塾大学保健管理センター

寺式・乳幼児分析発達検査表による発達の評価を行った。発達検査表による評価の対象年齢が4歳8ヶ月までであることから，それ以上の年齢の小児では，相談内容が発達に関わらない場合には，発達評価を行わなかった。問診・視診・聴診・触診，さらに必要に応じて，耳鏡・打腱器等による健康診断を行い，「要治療」，「要精査」，「経過観察」，「問題なし」の4段階で評価した。「要治療」は出来るだけ早く日本で専門的治療を受ける必要のあるもの，「要精査」は6ヶ月以内に日本で専門医受診の必要のあるもの，「経過観察」は経過によっては日本で専門医受診の必要が出てくるもの，「問題なし」は健康相談で解決したものである。評価に従い，保護者，または理解できる年齢では本人に助言・指導を行った。

成　　績

1. バンコク

1) 相談内容

相談者53人の延べ相談件数は77件で，約半数の相談者が複数の相談内容を有した（表2）。相談項目は，言語発達関連12件，精神運動発達関連12件，小児科6件，整形外科5件，自閉症4件，ダウン症3件，耳鼻咽喉科3件であった（表3）。発達に関する相談は計31件（58.5%），小児科以外の他科相談は計14件（26.4%）であった。

2) 相談後の評価

「要治療」は自閉症1件であった。「要精査」は計10件で，精神運動発達関連4件，自閉症1件，ダウン症候群1件,整形外科1件，眼科1件，耳鼻咽喉科1件，皮膚科1件であった。「経過観察」は計28件で，言語発達関連

表2　問診票記載の相談内容（延べ件数77件）（バンコク）

言語発達	10	母乳をほしがる	1
発達障害	6	指しゃぶり	1
体格（低身長・低体重など）	5	てんかん	1
自閉症	4	足趾の変形	1
育児	3	視力	1
ダウン症候群	3	ほくろ	1
多動	2	青あざ	1
アトピー性皮膚炎	2	肘の脱臼	1
中耳炎になりやすい	2	内反足	1
アレルギー	2	肛門部異常	1
汗疹	2	斜視	1
包茎	2	視線があわない	1
ころびやすい	2	まばたき	1
泣くとチアノーゼになる	2	便秘	1
食欲がない	2	人をかむ	1
集団生活ができない	2	吃音	1
舌小帯	2	川崎病	1
髄膜炎後遺症	1	貧血	1
頭をぶつける	1	目がうるむ	1
サルモネラ	1	かんしゃく持ち	1
爪をかむ	1		

表3　相談項目（バンコク）

言語発達関連	12
精神運動発達関連	12
小児科	6
整形外科	5
自閉症	4
ダウン症候群	3
耳鼻咽喉科	3
眼科	2
皮膚科	2
泌尿器科	2
栄養・食事	2

12件，精神運動発達関連8件，自閉症2件，ダウン症候群2件，小児科1件，眼科1件，耳鼻咽喉科1件，泌尿器科1件であった。「問題なし」は計14件で，小児科5件，整形外科4件，栄養・食事2件，耳鼻咽喉科1件，皮膚科1件，泌尿器科1件であった。

2. ジャカルタ

1) 相談内容

相談者44人の延べ相談件数は62件で，約半数の相談者が複数の相談を有した（表4）。相談項目は，皮膚科6件，小児科5件，整形外科5件，耳鼻咽喉科5件，アレルギー4件，予防接種4件，栄養・食事4件，言語発達関連4件，精神運動発達関連3件であった（表5）。発達に関する相談は計8件（18.2%），他科相談は計17件（38.6%）であった。

2) 相談後の評価

「要治療」は計5件で，上気道炎2件，ダウン症候群1件，虫刺症1件，アトピー性皮膚炎1件であった。「要精査」は計4件で，てんかん，けいれん，歩行異常，喘息の各1件であった。「経過観察」は計16件で，アレルギー5件，整形外科3件，耳鼻咽喉科3件，皮膚科2件，外科1件，小児科1件，言語発達関連1件であった。「問題なし」は計19件で，予防接種4件，栄養・食事4件，言語発達関連3件，小児科2件，耳鼻咽喉科2件，皮膚科2件，歯科1件，体格1件であった。

3. マニラ

1) 相談内容

相談者72人の延べ相談件数は96件で，約3分の1の相談者が複数の相談を有した（表6）。相談項目は，健康診断（発達確認）16件，育児10件，体格9件，言語発達関連9件，小児科7件，整形外科7件，眼科4件，歯科3件であった。発達に関する相談は計11件（15.3

表4　問診票記載の相談内容（延べ件数62件）（ジャカルタ）

予防接種	7	視力	1
咳が長びく	4	臍ヘルニア	1
喘息	3	尿路感染症	1
食事の量・質	3	蕁麻疹	1
吃音	2	白髪	1
成長痛	2	排便時出血	1
頭じらみ	2	極度なはずかしがり屋	1
食物アレルギー	2	慢性下痢	1
言語発達	2	指しゃぶり	1
アトピー性皮膚炎	2	異所性蒙古斑レーザ治療後	1
肥満	2	股関節脱臼	1
歯列	2	左きき	1
鼻出血	1	喘息様気管支炎	1
ダウン症候群	1	薬について	1
下肢の左右差	1	便が硬い	1
湿疹	1	熱性けいれん	1
アレルギー性鼻炎	1	チック	1
脱肛	1	よくころぶ	1
指をなめる	1	耳垢	1
包茎	1	中耳炎・副鼻腔炎	1
臼蓋形成不全	1		

表5　相談項目（ジャカルタ）

皮膚科	6
小児科	5
整形外科	5
耳鼻咽喉科	5
アレルギー	4
予防接種	4
栄養・食事	4
言語発達関連	4
精神運動発達関連	3
ダウン症候群	2
歯科	1
体格	1

%)，他科相談は計17件（23.6%）であった。

2) 相談後の評価

「要治療」は計2件で，ターナー症候群，遺尿が各1件であった。「要精査」は計2件で，軽度発達障害，けいれん，各1件であった。「経過観察」は計22件で，小児科6件，言語発達関連6件，眼科4件，健康診断3件，整形外科2件，泌尿器科1件であった。「問題なし」は計46件で，健康診断13件，育児10件，体格9件，整形外科5件，言語発達関連3件，歯科3件，栄養・食事2件，皮膚科1件であった。

考　　察

三都市で乳幼児・学童健康相談を行ったところ，主たる相談項目の中で発達に関係する相談は，バンコク31件（58.5%），ジャカルタ8件（18.2%），マニラ11件（15.3%）であった。小児科以外の他科相談（整形外科，耳鼻咽喉科，眼科，皮膚科，泌尿器科，歯科）は，バンコク14件（26.4%），ジャカルタ17件（38.6%），マニラ17件（23.6%）であった。マニラでは，発達確認といった健康診断的な相談が16件あり，それを除くと，発達相談19.6%，他科相談30.4%であった。

発達相談では，各地区とも言語発達関連が多く，ほとんどが多言語環境における発語の遅れであった（対応法[4),5)]に関しては詳細は省く）。精神運動発達関連では，軽度発達障害が多く，バンコクでは，深刻な問題が数件あったがジャカルタ，マニラでは問題となるものはなかった。発達相談と他科相談を除いた小児科関係の相談は，バンコク8件（15.1%），ジャカルタ19件（43.2%），マニラ44件（61.1%）であった。小児科の問題では，指しゃぶり，食欲がない，頭の形，咳が長びくといった小児の微症状[6)]や，育児に関して同じ言語・文化を共有する日本人小児科医との相談希望が多かった。マニラでは，発達について日本語で相談する機会が少ないため，発達確認の件数が多く，保健師による育児

表6　問診票記載の相談内容（延べ件数96件）（マニラ）

健康診断（発達確認）	16	よく熱が出る	1
体格（肥満，やせ，低身長など）	9	顔面神経麻痺	1
言語発達	7	ターナー症候群	1
栄養・食事（偏食，少食，サプリメントなど）	6	アレルギー	1
母乳	5	眼球結膜の色素沈着	1
おしゃぶり・指しゃぶり	5	眼脂	1
咳が長びく	4	斜視	1
発達障害	3	骨折	1
便秘	3	外反足	1
予防接種	3	歩き方	1
歯列	3	成長痛	1
包茎	3	鼾	1
育児	3	舌小帯	1
湿疹	2	頭の形	1
股関節のチェック	2	特発性血小板減少性紫斑病	1
けいれん・てんかん	2	テレビ視聴	1
夜尿	1	腹部の色素沈着	1
吃音	1	乳首に白い塊	1

表7　相談項目（マニラ）

健康診断（発達確認）	16
育児	10
体格	9
言語発達関連	9
小児科	7
整形外科	7
眼科	4
歯科	3
栄養・食事	2
泌尿器科	2
皮膚科	1
精神運動発達関連	1
ターナー症候群	1

相談を，小児科医の発達相談と併行しで実施した。ダウン症候群とターナー症候群についての相談は，日本における治療法や療育法についてであった。

海外で医療を受ける際に問題になるのは医療水準，言葉，医療費である。医療水準については，国民一人当りの総所得と相関があり，2002年の統計では，タイ2,000米ドル，フィリピン1,030米ドル，インドネシア710米ドルである[7]。言葉に関しては，バンコクには，日本の大学医・歯学部を卒業した日本語会話のできるタイ人医師（日卒医）が多数おり，日本語で診療している。また，日本語通訳のいる医療機関もある。ジャカルタには，日本の大学医学部を卒業した日本語会話のできるインドネシア人小児科医が筆者の知る限り2人在住している。マニラでは，日本語会話のできる小児科医はいないようで，日本語通訳を介するか，英語を用い診療を受けることになる。

以上から，バンコクでは，身体的問題に関しては，医療水準や言葉の面において十分な医療が受けられるものと考えられる。一方，ジャカルタ，マニラでは，身体的問題に関して，現地における医療についてのセカンドオピニオンを求める相談が多く，特に，マニラでは，発達についての日本語での相談希望（発達確認）が多かった。また小児科以外の他科相談に関しても，バンコクに比べジャカルタ，マニラでは解決が困難な問題が多く見られた。ジャカルタの皮膚科相談では，「日本人医師，日本語のできる医師は信頼できる」，また「シンガポールの日本人医師は信頼できる」と思い込んでいる相談者がいた。しかしながら，海外で日本人皮膚科医を探すのは容易なことではない。現状では，ジャカルタの有能なインドネシア人皮膚科医を通訳をともなって受診することが最良の方法と考えられた。海外赴任者が家族を帯同する場合，治安，医療環境，教育環境が問題となる。バンコク，ジャカルタ，マニラを比較すると，治安，医療環境，日本人学校の状況から，バンコクは身体的な問題を抱える小児については帯同できる環境と考えられるが，発達に関連する療育には問題点が多い。ジャカルタ，マニラは，身体的問題の医療対応にも問題点が多く，療育を必要とする小児の帯同は限られたものとなる。

総　　括

バンコク，ジャカルタ，マニラで小児の発達問題を中心に乳幼児・学童健康相談を行い以下の結果を得た。

1. 発達に関する相談は，言語発達関連，精神運動発達関連が多く，全相談項目に占める割合は，バンコク58.5%，ジャカルタ18.2%，マニラ15.3%であった。
2. 発達に関する相談後の評価は，バンコク要治療1件，要精査6件，経過観察24件，ジャカルタ要治療1件，要精査2件，経過観察2件，問題なし3件，マニラ要治療1件，要精査1件，経過観察6件，問題なし3件であった。
3. バンコクでは，発達相談を行う意義があった。ジャカルタでは現地における医療についての，セカンドオピニオンや小児科以外の他科相談が多かった。発達に関する相談では言語発達関連が中心であった。マニラでは，日常において日本語による小児科診療・相談の機会が少ないことから，小児科的相談が多かった。

謝　辞

健康相談を企画された海外邦人医療基金，現地でご協力いただいた各地区の皆様に深謝致します。

文　献

1) 外務省領事局政策課：海外在留邦人数調査統計　平成17年版．p 6-30，p 182-183，2005
2) 海外子女教育振興財団：バンコク日本人学校，ジャカルタ日本人学校，マニラ日本人学校，2005
3) 南里清一郎：海外巡回健康相談から―途上国での留意点―．海外医療 24：4-17，1999
4) 中島和子：言葉と教育．海外子女教育財団，1998
5) B.バックレイ（丸野俊一　監訳）：幼児期における複数言語の習得．0歳～5歳児までのコミュニケーションスキルの発達と診断　子ども・親・専門家をつなぐ．北大路書房，p 187-215，2004
6) 塙嘉之，他：〈綜説〉母親の訴えからみた微症状．小児科診療 47：9-13，1984
7) データブックオブ・ザ・ワールト 2005年版．二宮書店，p 26-27，2005